

まえがき

東南部アフリカの小国であるマラウイは、世界でもっとも貧困な国のひとつである。2004年の1人あたりの国民総所得は160ドルで、これは統計のある208カ国のうち201番目に位置する。またマラウイ政府が定める貧困ライン（1日約0.4ドル）以下で生活する人の割合は65%に達し、その多くが農村部に居住している。さらにこの国では天候不順に起因する不作が数年ごとに発生し、たとえば2005 - 06年には約400万人が食糧不足におちいった。

本書はこのようなマラウイの貧困問題の諸相を、農村世帯が営む生計の実態を詳細に検討することで明らかにする試みである。上述のようなマクロな統計数値からは、「貧困」とされる農村住民の具体的な日々の生計活動の内容を知ることはできない。また全国規模でおこなわれる標本調査の結果からは、国内各地の農村に存在する重要な差異や格差の実態を把握することが難しい。本書は筆者がマラウイ国内の6カ村でおこなった農村調査の結果をもとに、農村世帯の生計のありかたを具体的かつ多角的に明らかにし、「農村貧困問題」の背景にあるさまざまな要因を解明することを目的としている。

本書のもととなっている農村フィールドワークは、筆者がアジア経済研究所の海外調査員として2004年から2006年にかけてマラウイに滞在した際におこなった。マラウイ滞在中は、受入れ機関であるマラウイ大学社会調査研究所（Centre for Social Research, University of Malawi）から多大な支援をいただいた。また本書をまとめる段階では、さまざまな学会で報告をおこなった際にいただいたコメントや、後述の既発表論文に対する匿名の査読者の方々のコメントが大変有益であった。また本書の草稿段階では、同僚の重富真一、武内進一、岡本郁子の各氏から詳細かつ的確な意見を得て内容を改善すること

ができた。さらには本書出版に先立つ審査においても、研究所内および所外の匿名の査読者4名の方々から有益なサジェスチョンをいただいた。ここに記して深く感謝する次第である。最後に、マラウイへの単身赴任中に苦勞をかけたパートナーのおかげで本書を出版できたことに、とくに感謝したい。

2007年6月

高根 務